整理番号	36 - 2 - 1

現況分析における顕著な変化についての説明書（教育／研究）

法人名　新潟大学　学部･研究科等名　人文学部

1．分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目 Ⅰ　研究の実施状況

2．上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名 研究活動の実施状況

①　平成 19 年度までは科学研究費補助金（科研費）新規採択率が 30%前後で推移していたが，平成 20 年度は 41%，平成 21 年度は 35%に達した（資料１）。継続分も合わせると平成 20 年度は 31 件，平成 21 年度は 32 件となる。平成 22 年度は継続分だけで 27 件となる予定で，科研費採択教員が学部構成員総数（72 名）の半数を越える可能性が大きいという顕著な変化を確認できる（平成 22 年度申請は 34 件）。採択状況を分析すると（資料２），基盤Ｃの新規採択者が増加していること，また，若手教員の採択率が上がってきていることが指摘できる。さらには，大型科研費が増えてきており，平成 20 年度には基盤研究Ａが１件，若手研究Ａが１件採択された。これは，第１期中期目標･中期計画に合わせて開始した学部の研究プロジェクト体制が実を結んできていることを示していると考えられる。申請数・採択率の向上に向けて，平成 19 年度より採択経験者から４名の相談員を選出して，申請書の作成にあたってアドバイスを与えていること，不採択者に対し１件３万円のインセンティブを与えていることなどが，申請数・採択率の向上の一因となっていると考えられる。

資料１　科学研究費補助金採択状況

年　　度	新規申請	採択（新規＋継続）	新規申請率	新規採択率	新規採択額
平成 19 年度	21	27（ 7＋20）	31.0%	33.3%	51,570 千円
平成 20 年度	34	31（14＋17）	48.6%	41.2%	68,820 千円
平成 21 年度	37	32（14＋19）	52.1%	35.1%	51,081 千円

資料２　科学研究費補助金採択状況（（　）は継続，外数）

年　　度	基盤Ａ	基盤Ｂ	基盤Ｃ	若手Ａ	若手Ｂ	ｽﾀｰﾄｱｯﾌﾟ	萌芽研究
平成 19 年度	0	(4)	6（14）	0	1（1）	0	1
平成 20 年度	1	2（2）	7（14）	1	2（1）	0	1
平成 21 年度	(1)	1（2）	10（11）	(1)	1（3）	1	(1)

②　人文学部では，研究プロジェクトを支援してきた成果が徐々に出てきており，国際シンポジウム等の開催数が増加した（平成 20 年度３回，平成 21 年度５回）。さらに，国際交流は今までアジア，ロシア中心だったが，研究プロジェクトを通して交流をヨーロッパに広げることができ，平成 21 年３月には，学部初の試みとして，海外で国際シンポジウムを共催した（ボルドー第３大学における「＜声＞とテクスト論」プロジェクトによる「声とモデルニテ」シンポジウム）。また，「世界の視点をめぐる思想史的研究」プロジェクトが国際シンポジウム「ヘーゲルにおける世界と精神」，「19 世紀学研究」プロジェクトが国際シンポジウム「ヨーロッパ・半島・日本：新しい「文化学」の構築を目指して」をともに平成 22 年３月に開催した。学部の研究プロジェクト体制は，こうして，研究の高度化と国際化をアジア，ロシアのみならず，ヨーロッパにおいても組織的に展開するに至った。

整理番号	36 - 2 - 2

現況分析における顕著な変化についての説明書（教育／研究）

法人名	新潟大学	学部･研究科等名	人文学部

1．分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目Ⅱ　研究成果の状況

2．上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名 研究成果の状況

①　第１期中期目標・中期計画に合わせて人文学部では，個人研究の他に研究プロジェクトを立ち上げた（14 プロジェクト）。その研究成果が平成 20，21 年度に徐々に現れ，基盤研究Ａ１件（「大域的文化システムの再構成に関する資料学的研究」），基盤研究Ｂ３件（「＜声＞とテクスト論」，「世界をめぐる思想史的研究」，「東アジアの地域像の新構成」），若手Ａ１件（「佐渡･越後の文化交流史研究」）の採択につながった。研究プロジェクトの活性化は同時に個人研究の活性化にもつながり，基盤研究Ｃの採択（平成 20 年度，平成 21 年度とも，新規･継続を合わせてそれぞれ 21 件），若手Ａ，Ｂは平成 21 年度には前年よりほぼ倍増し６件となった。

②　毎年度人文学部で発行している人文選書・研究叢書は，限られた予算の中でも，平成 20 年度選書１冊，叢書２冊を，平成 21 年度選書１冊，叢書１冊を公刊することができた。とりわけ研究叢書『＜声＞とテクストの射程』は研究プロジェクトの過去５年間の成果を集めた学部初の試みであり，メンバー16 名のうち８名が論文を執筆し，１名が翻訳を行った。

③　平成 21 年３月に，研究プロジェクト「大域的文化システムの再構成に関する資料学的研究」が中心となって国際ワークショップ「敦煌・吐魯番文献と西北地域」を，平成 21 年 11 月には，同じく「東アジアの地域像の再構成」が中心となって国際ワークショップ「東北アジアにおける社会的生活基盤の形成」を開催した。これらの研究成果報告書は平成 21 年度に刊行された。両プロジェクトによる国際ワークショップはほぼ毎年開催されており，アジア地域研究の国際化は安定したといえる。
　研究プロジェクト「＜声＞とテクスト論」は，平成 22 年３月にボルドー第３大学で国際シンポジウムを共催し，プロジェクトメンバー５名が渡仏し講演を行い，研究成果のヨーロッパでの発表という新しいスタイルを創出した。その研究成果報告書は平成 22 年度に欧文で公刊される予定である。

④　人文学部教員の単著の数は年々増えており，朝日新聞等の書評に取り上げられるものも出てきた（鈴木光太郎著『オオカミ少女はいなかった』新曜社，平成 20 年。平成 22 年３月には韓国語訳が発刊された。他４冊が読売新聞，毎日新聞等の書評に取り上げられた）。平成 20，21 年度に公刊された著書，編著は 16 冊にのぼる（上記の人文選書・研究叢書は除く）。

整理番号	36 - 2 - 3

現況分析における顕著な変化についての説明書（教育／研究）

法人名	新潟大学	学部･研究科等名	人文学部

1．分析項目名又は質の向上度の事例名

質の向上度の事例１「研究の高度化」

2．上記1における顕著な変化の状況及びその理由

①　科学研究費補助金（科研費）新規採択率が平成 19 年度の 33.3%よりもさらに上昇し，平成 20 年度は新規採択率が 41%，平成 21 年度は 35%に達した。継続分も合わせると平成 20 年度は 31 件，平成 21 年度は 32 件となる。平成 22 年度は継続だけで 27 件採択となり，科研費を持つ教員が学部構成員総数（72 名）の半数に近づいている（平成 22 年度申請は 34 件）。また，平成 20 年度には基盤Ａと若手Ａがそれぞれ１件採択された。科研費の採択を一種の外部評価と考えるとすれば，学部の研究の質は向上しつつあると判断される。
②　学部研究プロジェクトの成果が出始めており，個人研究とプロジェクト研究のバランスが機能してきている。平成 17 年度より新潟大学人文学部紀要『人文科学研究』（年２回発行）において年に一度「プロジェクト特集」を組んでいるが，研究プロジェクト「＜声＞とテクスト論」は過去５年間に５回の特集を組み，その成果が，平成 22 年度に研究叢書『＜声＞とテクストの射程』（高木裕編，知泉書館）として結実した。さらに，平成 22 年３月には，ボルドー第３大学で人文学部との共催で「声とモデルニテ」と題して国際シンポジウムを開催した。また，研究プロジェクト「世界の視点をめぐる思想史的研究」も平成 20，21 年度にドイツから研究者を招きシンポジウムを開催した。こうして人文学部の研究プロジェクト体制は，成果を書物として刊行し，また，国内にとどまらず国際的にも高度な研究を組織的に展開する段階に達したということができる。

資料　研究プロジェクトによる研究会（公開）の開催実績（内数は国際シンポジウム等）

年度	平成 20 年度	平成 21 年度
開催回数	24（3）	18（5）

③　今までの研究プロジェクト交流が実り，愛媛大学法文学部と平成 20 年 11 月に研究交流協定を結び，同日新潟大学で愛媛大学法文学部長（当時）森孝明教授（ドイツ文学）が講演。平成 22 年２月には愛媛大学法文学部人文学科の今泉志奈子准教授（英語学）が人文学部で講演。平成 22 年３月には愛媛大学法文学部で学術講演会「人文学部の現在」を共催した（人文学部の２名が講演）。こうして国内初の学部間交流協定の締結に基づく共同研究という，新しいタイプの研究の高度化への端緒が拓かれ，顕著な変化と判断できる。
④　人文学部の心理学研究室は，眼球運動の世界的権威であった故本田仁視教授のもとで研究の推進と若手研究者の育成を行ってきた（遺稿『視覚世界はなぜ安定して見えるのか』知泉書館を平成 20 年度に研究叢書として刊行）。その成果が平成 20 年度には，鈴木光太郎著『オオカミ少女はいなかった：心理学の神話をめぐる冒険』（新曜社，平成 20 年。平成 21 年度に韓国語訳が出版）として現れた。また白井述准教授（実験心理学）の，乳児の聴覚と視覚の関連性に関する共同研究の成果は，学界から高い評価を受け，米国のオンラインジャーナル科学誌 PLos ONE（プロスワン）5(3)に共著論文として発表された（平成 22 年３月）。

整理番号	36 - 2 - 4

現況分析における顕著な変化についての説明書（教育／研究）

法人名　新潟大学　学部･研究科等名　人文学部

1．分析項目名又は質の向上度の事例名

質の向上度の事例２「研究の国際化」

2．上記1における顕著な変化の状況及びその理由

①　人文学部は今までアジア，ロシア地域を中心として教育研究交流協定を結んできたが，平成 19 年５月の国際シンポジウム「19 世紀と神話学」，および同年 11 月の国際シンポジウム「声とテクストとまなざしの 19 世紀」の開催を通じて，人文学部教員のヨーロッパの大学との研究交流が活発になり，平成 20 年度にフランス・ナント大学およびドイツ・ビーレフェルト大学と教育・研究交流協定を締結に至った。それぞれ人文学部教員の研究交流が実ったものである。平成 20 年 10 月には，「19 世紀の再評価―19 世紀の可能性―」と題した国際シンポジウムを開催し，フランス・ボルドー第３大学から２名の研究者，ドイツ・ビーレフェルト大学から２名の研究者を招聘した。
②　平成 22 年３月に同大学から言語文学部長以下計３名の教職員を招聘し，交流協定締結記念交流会を開催した。この機会に今後の研究交流について協議し，新たに教員研究交流の一環として平成 22 年度にビーレフェルト大学から研究者２名を受け入れ，研究プロジェクト「19 世紀学研究」と共同研究を行うことに合意した。同研究プロジェクトは，また，平成 22 年３月にフランス国立東洋言語文化大学教授グリゴレ・パスカル教授を招いて国際シンポジウム「ヨーロッパ･半島・日本：新しい「文化学」の構築を目指して」を開催した。さらに研究プロジェクト「世界の視点をめぐる思想史的研究」は，平成 20 年度に引き続き，国際シンポジウムを平成 22 年３月に開催し，ドイツ・リューネブルク大学教授 Ch.ヤメ教授を招聘した。
　この２年間で学部の研究プロジェクトを基盤に，ヨーロッパ諸国との研究交流を組織的に拡大・拡充していくことができる段階に達したと判断できる。
③　学部の研究プロジェクト「大域的文化システムの再構成に関する資料学的研究」が国際ワークショップ「敦煌・吐魯番文献と西北地域」を平成 21 年３月に，同じく「東アジア地域像の新構成」が国際ワークショップ「東北アジアにおける社会的生活基盤の形成」を同年 11 月に開催した。前者には，中国の研究者４名，韓国の研究者２名が参加し，後者には，中国の研究者５名（うち日本滞在中の者２名），韓国の研究者１名が参加した。両プロジェクトによる国際ワークショップはほぼ毎年開催されており，アジアにおける研究の国際化は安定したといえる。
④　研究プロジェクト「＜声＞とテクスト論」は，人文学部初の試みとして，平成 21 年３月に交流協定校であるフランス･ボルドー第３大学でシンポジウム「声とモデルニテ」を共催し，プロジェクトメンバー５名が参加して講演を行った。

資料　国際シンポジウム開催回数及び海外の参加者数

年　度	国際シンポジウム回数	参加国	海外からの参加者数
平成 19 年度	2	5	9（韓国），1（米），1（仏），2（独），1（伊）
平成 20 年度	3	4	4（中），2（韓），3（仏），4（独）
平成 21 年度	5	4	5（中），1（韓），6（仏＊），1（独）

（＊フランス６名の内にはボルドー第３大学でのシンポジウムに参加した人文学部教員５名を含む）

整理番号	36 - 2 - 5

現況分析における顕著な変化についての説明書（教育／研究）

法人名　新潟大学　学部･研究科等名　人文学部

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

質の向上度の事例３「研究成果の社会への還元」

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

①　毎年度人文学部で発行している人文選書・研究叢書は，限られた予算の中でも，平成 20 年度選書１冊，叢書２冊を，平成 21 年度選書１冊，叢書１冊を公刊することができた（資料１）。学部研究プロジェクト初の試みとして,「＜声＞とテクスト論」プロジェクトは過去５年間の成果を研究叢書『＜声＞とテクストの射程』に集成した。メンバー16 名のうち８名が論文を執筆し，１名が翻訳を行っている。

資料１　人文選書・研究叢書の刊行状況（平成 20，21 年度）

区分（出版社）	著　者	表　題（副題略）	刊行年次
人文選書 （高志書院）	鈴木孝庸・楊夫高 芳井研一	『平家物語と不思議』 『柳条湖事件への道』	平成 21 年 3 月 平成 22 年 2 月
研究叢書 （知泉書館）	宮﨑祐助 本田仁視 高木裕	『判断と崇高―カント美学のポリティクス』 『視覚世界はなぜ安定して見えるのか』 『＜声＞とテクストの射程』	平成 21 年 3 月 平成 21 年 3 月 平成 22 年 2 月

②　学部のさまざまのインセンティブにより，人文学部教員の単著の数は年々増えており，朝日新聞等の書評に取り上げられるものも出てきた（鈴木光太郎著『オオカミ少女はいなかった』新曜社，平成 20 年，平成 21 年３月には韓国語訳が発刊された。他４冊が読売新聞等の書評に取り上げられた）。

研究成果を社会へ還元する試みの一環として人文学部では，新たに，地域に貢献することを目的とする著作を刊行する取組を始めた（資料２）。栗原隆教授編著の著作については，教授が中心となり，人文学部教員が，地元の高校生などを念頭におき，それぞれの研究業績について平易に書き下ろした文章を集めたものである。また，矢田俊文教授編および池田哲夫教授編の著作は，直江兼続および佐渡の能楽という新潟の地に関係の深い対象についてのものであり,地域貢献にも寄与するものである。平成 22 年３月には長年の交流の結果として，佐渡市教育委員会と連携協定を締結することができた。人文学部の越佐（越後･佐渡）研究については，今後，自治体と協力しつつ，その成果を組織的に地元に還元していく体制が整ったということができる。

資料２　地域に貢献する単著・共著の刊行状況抜粋（平成 20，21 年度）

区　分（出版社）	著　者	表　題（副題略）	刊行年次
吉川引文館（単著）	矢田俊文	『中世の巨大地震』	平成 21 年 1 月
高志書院　（編著）	矢田俊文	『直江兼続』	平成 21 年 2 月
東北大学出版会（編著）	栗原　隆	『形と空間のなかの私』	平成 20 年 4 月
東北大学出版会（編著）	栗原　隆	『人文学の生まれるところ』	平成 21 年 3 月
高志書院　（共著）	池田哲夫	『佐渡能楽史序説』	平成 20 年 9 月